『讃岐典侍日記』における「てんめきたる」の表出について

岸　千里

はじめに

本稿では『讃岐典侍日記』の下巻に記されている「てんめきたる」の表出について、先行研究を踏まえて考察する。

一、『讃岐典侍日記』本文について

本稿で扱う『讃岐典侍日記』は、堀河帝に仕えた女房である藤原顕綱女、長子によって書かれたものであると考えられている。（以下長子と表記する。）作品中の時代は康和二年頃（一一〇〇年）から天仁元年十一月（一一〇九年）頃となっている。

現在この日記は上下二巻が現存している。[1] 上巻においては日記の始まりが「序」と呼ばれており、堀河帝が発病し亡くなるまでが記されている箇所は「看取り」の記と呼ばれている。下巻においては鳥羽帝への出仕のため宮中に再び出仕した日々が中心となっている。長子は戻ってきた宮中で目にする物事に触発され、故堀河帝と過ごした日々を回想していく。そして最後は「跋文」と呼ばれる叙述で締めくくられている。

本稿で扱うのは下巻の一部である。下巻冒頭は堀河帝崩御後から数ヶ月の時を経ている。宮中を退き、里居をする長子の元に白河院から鳥羽帝の元へ出仕してほしい旨が書かれている手紙が送られてくることにより、長子は再び宮中へ出仕することとなる。しかし長子は宮中がかつて堀川帝に仕えていた時と変わらないのに、鳥羽帝は堀川帝とは様々な点において違うことを、次のように叙述している。

その夜も御側に臥して見れば、夜御殿見るに、見し世に変はらぬ様したる。四角の登楼・御料などだにことなし。初めたる御渡りなれば、火取り・水取りなどの童持ちたりつる、御枕がみに左右に置かれたるぞ、違ひたることにてはある。御かたはらに臥したるも、「かやうにてこ

そ、宮上らせ給はに夜などはさぶらひしか」とおぼえて、あはれにのみぞ。みな人は、よげに寝れども、われはもののみ思ひ続けられて、目も合はず。滝口の名対面、御湯殿の狭間・殿上の口にて申す声ぞ、聞こゆる程におぼえたりしかど、耳に立ちて聞こゆる。左府生、時奏して、「尋ぬべし。心得ねば」といひて、時の簡に杭さす音す。左近の陣の夜行、てんめきたる、歩くも、昔に変はることなし。[2]

このように長子は堀河帝にお仕えしている頃の宮中と、現在では変わってしまったところや不変のままの様子を述べている。

この変・不変について小谷野純一氏は、

これまでの枠組みを転換し、参仕する人々を「昔」に関わらぬもの、〈変〉の相として捉え、また、己が身を、ただ一人伺候すると〈不変〉の相に於いて定めた上で、如何なる「前世」の因縁であるかと臨み、悲嘆の想いを提示して結ぶのであった。[3]

としている。小谷野氏の指摘のように、長子は変・不変を目にしながら、物思いのせいで他の人のように寝付けないとしている。そのなかで周囲で起こる様々な音として表出する「てんめきたる」という言葉に着目したい。

二、「てん」の表出について

「左近の陣の夜行、てんめきたる、歩くも、昔に変はることなし」とあるが、この「てんめきたる」とはどのようなことを表現しているのか。具体的に見ていきたい。

まず「めく」という言葉だが、「その様子を帯びる、それらしくなる、そのように見える、などの意を表する動詞を構成する。」とし、名詞、形容詞語幹、副詞、擬態・擬声語に接続するとされている。[4]

次に「てん」についてだが、先行研究ではこれを動物の「貂」であるとする説が有力である。しかし先ほどあげた「めく」は様々な言葉につく可能性がある。また写本[5]において「てん」はすべてひらがな表記となっている。このことから「てん」を「貂」以外の表記として「天・典・点・恬・転・殿・傳」などの言葉も考えられる。

しかし「点・転・天・殿・傳」においては音節自体に問題が無くとも、文脈にそぐわない表記となってしまうため、設定するのは難しいだろう。

「点」は「くろぼし、しるし、かすかなもの、消す、直す、汚す、きず、時刻、ひら、書く、調べる、かすかに触れる、場所を示す語、限度を示す語、そそぐ、うなずく」などといった意味がある。[6]そのため「点めきたる」といった表記にすると、左近の陣の夜行がどのようなものを帯びるのか、それら

しくなるのかが不明瞭なため、本文には当てはまらないと考えられる。前述されている左府生の時奏や「時の簡に杭さす音す。」と時刻での繋がりは見られるが、ここでは時間になったため時の簡に杭さす音が周囲に伝わったので左近の陣が夜行したと考えるのが自然なので、やはり「点めく」という表出は難しいものとなる。

「転」も同様、「まはる、うつる、かはる、こわね、かへって、うたた、まはす、うつす、すてる、さける、車上の荷物」[7]などの意味がある。左近の陣が夜行により場所をうつるので、「うつる」や「かはる」といった意味に「めく」は不自然な表記となる。「天」は「あめ、天體、太陽、宇宙の主宰者、自然、君、父、たのみとすべきもの、時節、日、陽、乾、世の中、運命、生まれつき、いのち、大きい、すみうつ、髪切る、先んずる」[8]などの意味がある。やはりどれも「めく」を用いることで文脈に合わないものとなってしまうため、「天」の字を用いることは考えにくいだろう。

また、表出のみで考えれば「殿」や「傳」のように音声と紙の上での表記が異なるものに加え、撥音便によるものなども候補にはなるが、どれも文脈に合わず、明解でないためにこれらはあてはまらないと考えられる。

「典」と「恬」に関しては可能性があると考えられる。「典」は「禮・儀式」[9]や「盛大に行うはれやかな行事。盛典。儀式」[10]とある。左近の陣の夜行に関して『延喜式』巻四十五、左近衛府の「行夜」には次のように叙述されている。

凡行夜者。内裏官人一人。近衛一人。[起二亥一尅一迄二子四尅一。但右起二丑一尅一迄二寅四尅一。]大蔵近衛二人。内蔵近衛一人。[起二戌一尅一迄二亥一尅一。但右起二亥一尅一。迄二子一尅一。]

夜行自体は儀式のひとつであると位置づけられている。しかしながら儀式とはいえ数人で夜中に歩くものだった。よって盛大に行われていたようにはみられないので、「めく」という言葉を用いることにより、雰囲気が儀式めいているという表現を考えることが出来るだろう。ただし、長子が物思いをしている時刻は夜行がされているので、様子が見づらい、または見えない状況において儀式めいた雰囲気を感じることは実際では難しいだろうと思われる。後の記述が「歩くも、昔に変はることなし。」とされていることから、「儀式めいて歩いているのは昔とかわらない」と長子自身が知っている昔の状況という表出になるだろう。

夜という状況を考慮すると、恬には「やすらか、しづか」[12]という音に関する意味を持った語句の表現のほうが適しているように思われる。「典」と同様に、後述の「歩くも、昔に変はることなし。」を踏まえると「左近の陣が夜行するのが静かさを帯びているのは昔と変わらない」といった表出となる。しかし左近の陣の夜行が静かに行動しているのならば、「静かめいている」や「静けさを帯びている」という意味で

の表現を用いるのは少々難があるように思われる。もし「時の簡に杭さす音」という契機により左近の陣が夜行するという定型があり、長子がそれを知っていたとすれば、昔と変わらずに静けさをおびた夜行をしているといった意の表出になるだろう。

三、『讃岐典侍日記』の「てんめきたる」

先行研究ではこの「てんめきたる」の「てん」を動物の「貂」として解釈している。玉井幸助氏は「てんめきたる」について「貂が歩くやうに聞えたの意か」[13]とし、今小路覚瑞氏は「『てん』は『貂』か。貂のような様子で歩くの意か。貂は夜行性で動きが俊速である」[14]とし、両者とも「貂めきたる」が貂の歩く様子について表現されたものだとしている。また、今井卓爾氏は「夜行性の貂のようなもの」[15]と左近の陣の夜行が夜に活動する貂の習性をなぞらえた表現としている。小谷野純一氏は「『てんめきたる』の『てん』の箇所に関しては、諸注、肉食目の獣、『貂』を当てて解しているが、そもそも、この『貂』という夜行性の小動物について、作者が習性迄も知悉していたか甚だ疑わしい上に、解の内実の点でも疑問が残るようだ。」[16]と「てん」の表出について疑念を示している。小谷野純一氏は『枕草子』の本文に、役人が歩く様子があると指摘し、

こうした確認からすれば、ますます『貂』の組入れ臨むのは困難となるかに思われる。極めて俊捷な動物である以上、足音が特徴的な知覚対象となる筈はない。となると、ここは、歩く動作をめぐる比喩ではなく、『枕草子解環』が「貂と近衛官人との夜行性のみに共通点を認めたもの」と指摘している通り、単に夜行性のみ着眼した見立てと解する外はないことになる。[18]

との見解を示している。

前述したように、「てんめきたる」の「てん」を「貂」としながらも、その表出に関してははっきりとしていない。

この「貂」[19]という動物について、『倭名類聚抄』では、「似鼠黄色、皮堪作裘」[20]と説明している。『続日本紀』には聖武天皇の時代、神亀五年正月十七日条に渤海使が日本に対し「貂の皮三百張を附けて送り奉る。」[21]としている。このように貂は毛皮製品として用いられ、贈り物としても使われていたことから、貴重な品だったと伺える。

日本における貂の歴史について大館大學（智志）氏は、

後述するように、『御堂関白記』に藤原道長が長和四年(1015)年に宋僧に貂裘を三領送り、さらにその直後に彼は別の宋僧に貂裘を一領送ったとの記述がある。この事実は十一世紀初頭の貴族社会において、貂裘はまだ重宝との認識があったことを示している。（中略）黒貂裘（または貂裘）が使われなくなったのは、原皮の供給不足だけではなく、動物製品一般を貴族社会が忌避するよ

うになった事と関係があるだろう。貴族社会の宗教的な観点（不殺生戒、穢れなど）から、クロテンの皮衣を含む、動物製品観の詳しい変遷も調査する必要もあろう。[22]

としている。「貂」の毛皮を貴重な物として扱っていたというのは、『三代実録』の巻四十七、仁和元年正月十七条の記述からも伺える。

十七日癸酉。天皇御二建礼門一。觀二射礼一。是日。始禁レ着二用貂裘一。但参議已上不レ在二制限一。[23]

貂裘を着用できる身分が制限されていたということから、身につけることが出来るのは、一部の権力者であったと思われる。

また、『太神宮諸雑事記』では永承元年の丙戌に

春之比、豊受太神宮御饌殿、貂参入之、二宮朝夕御膳物於、悉喰散世利。因之宮人神主内人等、相搆、雖塞穴、件御饌猶毎日喰損。仍一乃貂狩出、雖打殺五十六乃貂倍来、更不留。[24]

ともあり、「貂」が動物として身近な生き物だったことが伺える。[25] もっともこの場合は神饌を食い散らかしたことから人々を困らせる存在だったようである。

前掲した諸氏の「てんめく」の見解には、それぞれ「貂」があてられていた。玉井氏は左近の陣の夜行について貂が歩く足音とし、今小路氏、今井氏は貂の歩く姿と解釈していた。小谷野氏は貂の夜行性という性質が左近の陣が夜に行動する性質と近似していると解釈していた。

鈴木智美氏はこの接辞語である「～めく」について用例を挙げ次のように指摘している。

「XがNめく」の意味：

スキーマ的意味：名詞Nで表される事物の特徴の一部が事物Xに現れ出る

意味①：

事態の本来の成り行きとして、事物Nが持つ期待される特徴の一部が事物Xに現れ出る

例：陽射しが春めいてきた。

意味②：

事態の本来の成り行きではないが、事物Nが持つ特徴の一部が事物Xに現れ出る。

例：ついお説教めいたことを言う。[26]

実際『枕草子』に「～めく」といった表現がされている場面がある。

a花の木ならぬは、かへで、かつら。ごえふ。たそばの木、しなき心地すれど、花の木ども散り果てて、おしなべて緑になりにたる中に、時もわかず濃き紅葉のつやめきて、思ひもかけぬ青葉の中よりさし出でたる、めづらし。

bことのの御ぶくのころ、六月のつごもりの日、おほはらえといふことにて、宮のいでさせ給ふべきを、しきの

御ざうしをかたあしとて、官のつかさのあいた所にわたらせ給へり。そのよさり、あつく、わりなきなやみにて、なにともおぼえずせばく、おぼつかなくて、あかしつ。つとめて、みれば、やのさま、いとひらにみじかく、かわらぶきにて、からめき、さまことなり。[27]

このように昔から「〜めく」という言葉を用いていたことが分かる。鈴木智美氏の見解に基づくとaは①bは②の意に当てはまると考えられる。

つまり『讃岐典侍日記』での「てんめきたる」は「貂」について本当に「貂」そのものらしく見えるのか、それとも「貂」らしくない物が一見「貂」のようにみえるのか、という二通りの解釈が出来ることとなる。

今小路氏、今井氏が指摘していた「貂」の姿のようであるとの見解について確認していく。本文には他の人のように眠れないため、「目も合はず。」とし、長子が眠れずに目をあけていることがうかがえる。しかし他の人が眠るような夜中に目を開けているからといえ、これらの動作が克明に見えるかは難しいといえるだろう。このことから左近の陣の夜行がまさしく「貂」らしく見えるといった解釈は難しく、「貂」の性質を踏まえたものであるとの表出ではないだろうと位置づけることが出来る。

一方、玉井氏、小谷野氏が指摘していた「貂」の足音については、『古今著聞集』に次のような記載がある。

狐戸より入りて、頼光の寝たるうへの天井にあり。この天井ひきはなちて落ちかかりなば、勝負すべき事、異議あらじと思ひためらふほどに、頼光も直人にあらねば、早くさとりにけり。おちかかりなば大事なりと思ひて、「天井に、いたちよりも大きに、貂よりも小さきものの音こそすれ」といひて、「誰か候」と呼びければ、綱、なのりて参りたりけり。[28]

右の本文からは貂の足音はいたちよりも大きいと解釈が出来る。ただしこの場面から厳密な音量まではうかがい知ることはできない。しかし貂がいればその足音に気付くことが不自然でないとしたら、それなりの音量があったことは伺える。そうなれば『讃岐典侍日記』の「てんめきたる」の本文のように夜という状況でも視覚ほど認知の難しさはないだろう。

この左近の陣の夜行が「貂」のように音をたてていたとするならば、その立てる音は「貂」が音を立てるのに似ているという意の表出として考えられる。

さらに、小谷野氏が解釈していた貂が持つ夜行性という特徴についての表出という点は、この音の表出に付随するもう一つの要素として捉えることも可能だろう。『古今著聞集』における場面は室内であり、比較的音が聞こえやすいと思われる。左近の陣の夜行は屋外で行われていた。よって長子のもとに貂の足音が聞こえていたという表出のみではない可能性も考えられるからである。ただし、小谷野氏も指摘してい

たように、当時長子が貂に関してどれほどの知識を持っていたかについては不明である。「てんめきたる」という表出が夜に行動するという特徴のみを結びつけての表出とは考えにくいだろう。

よって、「貂」そのものらしくない左近の陣のの立てる音は「貂」の足音のように音を立てているとの解釈だけではなく、夜行性である「貂」のように左近の陣も夜行をしているといった意が込められた表出であるとの解釈が考えられる。

おわりに

『讃岐典侍日記』における「てんめきたる」については、ほかにも考察の余地があるだろう。本稿では「てん」という語句に注目したが、他の語句である可能性も含め、今後より精密な論証を行っていくことを次の課題としたい。

注

(1) 石埜敬子氏は『讃岐典侍日記』の構成について先行研究をまとめ、「この日記は、古い時代には相当に流布していたものらしく、「今鏡」「本朝書籍目録」「八雲御抄」「徒然草」「和歌色葉集」などに名前がみえている。(中略) 又、現存する伝本は、上巻のみのものと、上・下巻のものの二種類で、本朝書籍目録に「讃岐典侍日記三巻」とある記事を満足させるものは、一本も発見されてはいない。そのため、形態について、これまでにいくつかの説が出されてきた。主な説は次の二つになる。①もと三巻であったものが末の一巻を失い、末の一巻の残欠が中巻の末に附着した。②もと三巻であったものが中巻を失った。①は玉井氏に代表され、②は森田氏や尾崎氏によって出されている説である。(中略) 現在の日記そのものの中から問題解決の糸口をつかみ出すことが、今後の日記文学研究の方向として要求されねばならない。」(「讃岐典侍日記」日本文学研究資料刊行会編『国文学』三月号 昭和四十年) として明言を避けている。このように構成については様々な先行研究が存在するが、今回は現存している二巻を上巻・下巻と位置づけることとする。

(2) 小谷野純一『校注讃岐典侍日記』新典社 平成九年 なお、断りの無い限り本文の引用は同書に拠る。

(3) 小谷野純一『讃岐典侍日記全評釈』(昭和六十三年 風間書房)

(4) 『角川古語大辞典』(角川書店 平成十一年)

(5) 今回は本文校訂にあたり、本位田重美、植村真知子編『関西学院本 さぬき日記』(和泉書院影印叢刊 十四 第一期 和泉書院 昭和五十四年)・塙保己一編『群書類従本』(続群書類従完成会 昭和三十四年)・守屋省吾解説新典社善本叢書四『讃岐典侍日記』(西尾市立図書館所蔵岩瀬文庫本 新典社 昭和五十六年)・神宮文庫蔵村井敬義奉納本石井文夫解説勉誠社文庫六十九『讃岐典侍日記』(勉誠社 昭和五十四年)の四本を参考とした。

(6) 諸橋轍次『大漢和辞典』(大修館書店 昭和三十五年)を参照し引用した。

(7) (5) 参照

(8) (5) 参照

(9) (5) 参照
(10) (3) 参照
(11) 黒板勝美編『延喜式後編』(吉川弘文館　昭和六十一年)
割注部分は括弧で括り引用した。
(12) (5) 参照
(13) 玉井幸助『讃岐典侍日記通釈』(朝日新聞社　昭和二十八年)
(14) 今小路覚瑞『讃岐典侍日記』(笠間書院　昭和五十一年)
(15) 今井卓爾『讃岐典侍日記譯注と評論』(早稲田大学出版部　昭和六十一年)
(16) 小谷野純一『讃岐典侍日記全評釈』(風間書房　六十三年)
(17) 小谷野純一氏は『枕草子』の本文に「時そうする、いみじうをかし。いみじうさむき夜中など、こぼこぼとこぼめき、くつすりきて、つるうちならして、なんなのなにがし、時、うしみつ。ねよつなど、はるかなるこゑにいひて、時のくひさすおとなど、いみじうおかし。ねこゝのつ。うしやつなどぞ、さとびたる人はいふ。すべて、なにもなにも、たゞよつのみぞくひにはさしける。」と引用して「てんめきたる」と近衛官人が沓音を立てて歩く様子があると指摘し引用している。『枕草子』本文は萩谷朴『枕草子解環』(同朋出版　一九八三年)から引用した。
(18) (16) 参照。
(19) 『日本国語大辞典』(小学館　昭和四十七年)には「イタチ科の哺乳類。体長三十～四十五センチメートル。尾長約二十センチメートル。イタチに似ているが体が大きく尾が長く太い。本州以南に分布するが、近年は北海道にも分布を拡大している。夜行性で山林に住み、ネズミ、小鳥、昆虫、果実などを食べる。」とされている。
(20) 諸本集成『倭名類聚抄』(臨川書店　昭和四十三年)引用。
今回は引用するにあたり十巻本を使用した。
(21) 青木和夫ほか校注『続日本紀』(岩波書店　平成二年)
(22) 詳しくは、大館、大學(智志)「日本古代のクロテンの皮衣(黒貂裘)の形状について」(生き物文化誌学会『BIOSTORY』十四巻　平成十二年十二月)参照。
(23) 黒板勝美編　新訂増補『日本三代実録』(吉川弘文館　昭和四十六年)
(24) 胡麻鶴醇之ほか校注『神道大系　神宮編一　皇太神宮儀式帳　止由気宮儀式帳　太神宮諸雑事記』(精興社　昭和五十四年)
(25) 李時珍編『本草綱目』には、「貂鼠」とされており、次のような説明がある。
〔釈名〕栗鼠〔爾雅翼〕松狗〔(時珍曰)貂亦作鼲。羅願云。此鼠好食栗及松皮。夷人呼為栗鼠松狗。〕
〔集解〕(時珍曰)按許慎説文云。貂鼠尾大而黄黒色出丁零國。今遼東高麗及女直撻靼諸胡皆有之。其鼠大如獺而尾粗。其毛深寸許。紫黒色。蔚而不耀。用皮為裘帽風領。寒月服之。得風更暖。著水不濡。得雪卽消。拂面如焰。拭眯卽出。亦寄物也。惟近火則毛易脱。漢制侍中冠金璫飾首。挿貂尾。加以附蟬。取其内勁而外温。毛帯黄色者為黄貂。白色者為銀貂。
なお、便宜上、割注部分は「括弧」で括り引用した。
(26) 鈴木智美「接辞『～めく』の意味と用例」(『留学生日本語教育センター論集』東京外国語大学　平成十六年)引用のため一部表記を私に直した。
(27) 萩谷朴『枕草子解環』(同朋出版　昭和五十八年)なお考

察のため、便宜上本文にa、bとした。

(28) 西尾光一校注『新潮日本古典集成　古今著聞集　上』(昭和五十八年　新潮社)